第三〇章　黄河畔の戦闘（三〇）

神界の場面はここに急転し、大八洲彦命は濁流みなぎる黄河の畔にすすまれた。ここには稲山彦という金毛九尾の一派の部将が、鉄城を築きて控えておる。これは竹熊、木常姫らの部下である。

今や大八洲彦命は黄河を渡って竜宮城に帰還せられむとするところである。帰還されては竹熊の目的成就し難きをおそれ、ここに稲山彦に命じて、大八洲彦命を中途において亡ぼさむとしたのである。大八洲彦命はかかる企みのあらむとは寸毫も心づかず、少数の部下を引き率れて城下に近づいた。

シナイ山に御座す厳の御魂はこの現状をはるかに見そなわし、救援のため高杉別に命じ杉松彦、若松彦、田子彦、牧屋彦、時彦の各部将に数百の神軍を引率せしめ、天の磐船に乗りて応援に向かわしめられた。敵の城内よりは盛んに火弾を投下し、縦横無尽に攻め悩まさむとす。このとき前述の応援軍は天の磐船に乗り天上より火弾を投下し敵城を粉砕した。敵は狼狽のあまり四方に散乱した。

折しも大虎彦という悪神は、数万の蒙古の魔軍をかつて大声叱呼し、よく之を操縦指揮し濁流を渡って、大八洲彦命の陣営に一直線に襲撃する。にわかに西南の空にあたっ

て、黒煙濛々と立ち現われたと思う一刹那、雲は左右にサット分れて勇猛無比の獅子王現われ、軍扇をあげて咆吼怒号しはじめた一刹那、数万の暗星は地上に落下した。大小無数の暗星は地上に落下するとともに、大小無数の獅子と変化し神軍目がけて突進しきたった。

このとき東北の天より雲路を分け火を噴きつつ進みきたる竜体がある。これは乙米姫命であった。命は大八洲彦命の眼前に現われ、麻邇の珠を渡し何事か耳語して、また元のごとく東北の天にむかって帰還した。ここに大八洲彦命は麻邇の珠を受取り、応援軍なる田子彦と牧屋彦に預けた。すると田子彦、牧屋彦はにわかに態度一変し、敵の稲山彦についてしまった。

稲山彦は、大虎彦と獅子王の応援ある上に麻邇の珍宝を手にいれ、勇気は頓に百倍し大八洲彦命を散々に打ち悩めた。

あゝ大八洲彦命の運命は如何になりゆくであろうか。

（大正一〇・一〇・二二　旧九・二二　加藤明子録）

瑞　月

久方の天津御空の雲わけて
　轟き来たる天の磐船

神力(みちから)もいづの御魂の神寶
　稜威(みいづ)も高杉別のはたらき